

# *The Merchant's Tale* の May は 五月のように美しいか

赤堀 志子

Is May in the *Merchant's Tale* beautiful as “May”?

Naoko Akahori

This article focuses on a woman named May in *The Merchant's Tale*, one of the tales which make up *The Canterbury Tales* written by Geoffrey Chaucer. It is a funny story in which an old soldier, January, suddenly feels he cannot help marrying with a young and obedient girl, and May, who is chosen to be his wife. In the first half of the article, the characteristics of May are analysed in terms of January's garden, which is a key to her function in the story. The narrator, Merchant, praises January's garden, comparing it with that of the *Roman de la Rose*, only to emphasize the old soldier's vagary concerning his wife, May. In the second, May's kind of beauty, represented by the word *fressh*, is discussed in the context of the fourteenth century and Chaucer's work. By closely examining the usages of *fressh* throughout *The Canterbury Tales*, the sarcastic meaning of the word and the role May achieves in the story are elucidated.

本論では、ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) の代表作である、『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) を構成する物語の一つ、『貿易商人の話』(*The Merchant's Tale*) に登場する女性メイ (May) について、メイを自分の庭に閉じ込めた (あるいは、閉じ込めたと思い込んでいる) 老騎士ジャニュアリ (January)、そして閉じ込められた (とされる) 庭との関連から論じる。『貿易商人の話』の主人公にして庭の持ち主である老騎士ジャニュアリの庭は、語り手の貿易商人の口を通じ、『薔薇物語』(*Le Roman de la Rose*) の庭と比較されている。チョーサーといえば、『薔薇物語』の英語訳を手がけたことが、後世に残る偉大な文化的業績として知られている。『貿易商人の話』で描かれる庭は、『薔薇物語』の庭と比較されることにより、逆に『薔薇物語』との落差が強調され、若い女性や、自らの妄想に振り回される老人の愚かさや可笑しさが伝わってくる。しかし、チョーサーは、決して道徳的な意見を挟むわけでもなく、メイの浮気に嫌悪感を示すわけでもない。老人の無謀な願いと、したたかな若い女性とのちぐはぐな結婚生活が、ひたすら滑稽に描かれ、読者の笑いを誘うのである。メイを論じるに当たり、まず、『薔薇物語』の庭と『貿易商人の話』の庭の比較を行い、そのずれに気づかぬ老人の妄想に合わせながら若い

男性との逢瀬を楽しむ若き妻、メイの女性像に迫る。

## 1. ジャニュアリの庭は美しいか

二人の詩人によって完成された『薔薇物語』は、まず、ギョーム・ド・ロリス (Guillaume de Lorris) により詩人の夢物語が宮廷風恋愛の作風で描かれる。ロリスの創り上げた献身的な女性崇拜を騎士の歓びとする女性礼賛をテーマとする前半に対し、後半はジャン・ドゥ・マン (Jean de Meun) により、性愛の現実が描かれ、女性崇拜を攻撃し、恋愛と結婚は種の保存を目的とするものだという流れで物語が進む。

『薔薇物語』では庭の中で物語が進むが、舞台となる庭は、ロリスの手により『薔薇物語』の前半で詳しく描かれている。この庭は、四方を高い壁で囲われており、外側からは内側を窺い知ることはできない。このように四方を囲まれた庭 (hortus conclusus) の大きな特徴の一つは、内側の世界が外界から遮断されていることである。唯一壁に作られた小さなドアだけが、庭の内側と外側とを結び付けているが、内側から鍵をかけられているため、内側から受け入れてもらえぬ限りは中に入ることができない。また、この庭では、悦楽や楽園とは結びつかない性質のものはすべて壁の外側に刻まれ、庭の外に押し出されることにより、壁の内側の悦楽が堅固に守られている。<sup>1</sup> 庭の内側の世界は常春で、花が咲き乱れ、小鳥のさえずりであふれている。

一方の『カンタベリー物語』のジャニュアリの庭は、『薔薇物語』の庭でも及ばない」と表されるとおり、花々は1年中咲き乱れ、花の香りや果物の香りで満たされている。ところが、ここでは『薔薇物語』の庭から締め出されているはずの「老年」、つまりジャニュアリ自身が庭から排除されているどころか、庭の主人だということに、ずれが見られる。『薔薇物語』で外壁に刻まれている「老年」は女性の姿で表されているが、薔薇物語やエデンの園の主人公になぞらえると、その主人公が老騎士ジャニュアリというのでは、可笑しさしか込み上げてこない。その「老年」の説明に、『時』は留まることができず、絶えず流れて行って戻りはしない。流れ下る一方で、一滴も戻ってこない水のようにだ。<sup>2</sup> (380-84) と書かれているからか、『薔薇物語』の庭には、ジャニュアリの庭にはこんこんと湧き出る泉が存在しない。

ジャニュアリが楽園をテーマとする庭を作り上げたのは、老年になってから抱いた結婚願望と結びついている。ジャニュアリの抱く「妻とは、従順で楽園そのものである」という考えは、男性中心的で、自己中心的である。その自己中心性だけでも滑稽であるが、語り手である貿易商人が、結婚2ヶ月目の自分の新妻がいかにひどいか、プロローグで散々に愚痴をこぼした直後に語られるのであるから、その滑稽さがさらに強調されるというわけである。プロローグでの女房持ちがいかに不幸かという嘆きから一転、物語では聖書やいにしえの賢人の言葉を独自に解釈して女房礼賛を叫ぶという変貌振りで、物語が進むにつれ、ジャニュアリがいかに滑稽なまでにひどい目に会う運命か、読者に十分に期待させ

る導入としての役割を、貿易商人は果たしているのである。

ジャニュアリによる女房礼賛の例をいくつか挙げておくと、まず旧約聖書のアダムとイブの誕生の場面に触れ、「アダムを創られた後、『この男の助けとして、この男に似たものを、これから造ってやろう』といわれ、それでイブを作ったのだ」と述べ、この場面にかに女房がすばらしいかの根拠が提示されているというのである。

Heer may ye se, and heerby may ye preve,  
That wyf is mannes helpe and his confort,  
His paradys terrestre, and his disport. (Mer. T. 1330-32)

更にギリシャの賢人セオフラストスの「また妻をめとったところで、すぐ間男されるのがせきのやまだ」(Mer. T. 1305-06)<sup>4</sup>という言葉、「こんな嘘のたわごとは気にかけないことだ」(Mer. T. 1307-08)<sup>5</sup>と一蹴し「セオフラストスなどは避けて、私のいうことをお聞きなさい」という。

この主張がいかにも『貿易商人の話』のプロローグと対照的に比較をしてみると、プロローグにおいて、貿易商人は、学僧が話した夫に従順なグリゼルダ (Grisildis) の物語を聞いて、自分の境遇と比較し、次のように嘆いてみせている。

I have a wyf, the worste that may be;  
For thogh the feend to hire ycoupled were,  
She wolde hym overmacche, I dar wel swere. (Mer. Pr. 1218-20)

結婚してまだ2ヶ月の新婚でありながら、女房をもらったことによりひどい目にあっていると嘆く貿易商人の言葉が、これからジャニュアリの身にふりかかるであろう不幸を予測させる。しかし、プロローグを終えて、ジャニュアリの物語を語り始めると、一転して妻と夫とは一心同体、結婚とは喜びであり、妻とは樂園である、と賛辞の言葉を並べ立てている。しかも、物語の設定は、『学僧の話』(The Clerk's Tale) と同じロンバルディア、グリゼルダの父親であるジャンクラ (Janicula) は、老騎士ジャニュアリの名前と似ていないとも言えない。『学僧の話』の筋書きに簡単に触れると、ロンバルディアでも随一の立派な家系の貴族であるワルテル (Walter) は、なかなか結婚をしなかったため、家臣たちから口々に説得され、その熱意に負けて結婚相手を探すことを決意する。そして結婚について、「わたしはこれまで結婚してはふたたび得がたいような自由な生活を享楽してきた。自由であった身も、結婚すれば奴隷の身になるはずだ」(Cl. T. 145-47) と述べている。これは、ジャニュアリとはまったく正反対の結婚観であり、奴隷になることを極度に警戒する。ワルテルは小さな村で暮らすグリゼルダに純真さを見出し、妻とすることを決めるが、それでもなお安心できず、次々に試練を与えて様子を見守り、やっと結婚生活に踏み切る

のである。同じロンバルディアを舞台に、結婚に慎重な若く立派な貴族ワルテルと、思いつきで結婚を決める老騎士、貧しいけれども純真な心を持つ女性グリゼルダと浮気の現場を見られても堂々と言い逃れて見せる女性メイ、この二組の夫婦は非常に対照的であり、この二つの物語がこの順番で並ぶことにより、相乗効果が表れていることは間違いない。当時の読者（聴衆）がこの順番でチョーサーの語る『カンタベリー物語』を聞いたとすれば、セオフラストスの言うとおりに事が運ぶことを百も承知の上で、対照的な二つのロンバルディアの物語を大いに楽しんだことであろう。

そして、読者の予想を裏切ることなく、楽園と思われた庭では、よき妻とよき従者を装う偽善者（「偽善」も薔薇物語の外壁に押し出されている）たちにより、ジャンヌアリに対する裏切り行為がジャンヌアリの目の前で終わってしまう。四方を囲い、鍵をかけて外界と完全に隔てられていたはずの世界は、メイが合鍵を作って従者に渡すことにより、魔法が解けてしまい、ジャンヌアリは理想の妻と思っていたメイの真実の姿を見てしまうこととなるのである。

このように『薔薇物語』との対比、聖書や賢人の言葉の乱暴な解釈、『学僧の話』との対比などから、『薔薇物語』にも劣らないというジャンヌアリの庭は、文字通り、ジャンヌアリの庭の美しさを表しているというよりも、老騎士ジャンヌアリに対する痛烈な皮肉として受け取ることができる。ジャンヌアリは、聖書同様に、『薔薇物語』も自分に都合よく解釈し、その庭の内側世界の「悦楽」という部分に惹かれ、同じような庭を作り上げたのであろう。悦楽の庭の持ち主に相応しい人間だと思い込んでいる老騎士の滑稽さが、『薔薇物語』と対比されることにより際立っている。チョーサーは、見事に『薔薇物語』の庭を俗物的に貶め、欲望に目が眩んだ老人の自己中心的な思い込みによる欲望の庭として描き、その落差から読者の笑いを誘っている。

## 2. メイは美しいか

兄弟の説得にもかかわらず、ジャンヌアリの結婚の意志は変わらないため、メイという名の女性が嫁ぐことに決定する。メイは、『薔薇物語』の登場人物から考えれば、「歓喜」ということになろう。「悦楽」の恋人である「歓喜」は次のように描かれている。「『歓喜』の柔肌はほんのり色づいて、まるで咲き始めた薔薇のようだった。棘が触れただけでも裂けてしまうかもしれない。額は美しくすべすべしていて、皺の一本もない。眉は茶色で弓形である。陽気さをたたえた眼はとても快活で、申し合わせたように眼のほうがいちも小さな口より先に笑うのだった。鼻についてはどう申し上げればよいかわからない。蠟燭型を取ってもこれほどうまく作ることはできまい。口は小さく、いつでも恋人に接吻する構えができている。ブロンドの髪は輝いていた。これ以上何と言えはいいだろう。『歓喜』は美しく、みごとな装いをしていた。髪を金の飾り紐で結び、新しい金縁飾りの被りものを頭に載せていた。この手のものは二十九も見ただけ、絹の細工がみごとなこれほどの

ものは、かつてお目にかかったことがない。身体には全体が金糸飾りの絹の服を纏い、恋人のロープと同じ作りなものであるから、彼女はなおさら誇らしげだった」(『薔薇物語』(840-62)<sup>7</sup>)。この『薔薇物語』における「歓喜」の美しさは、当時のイギリスの美女の指針とされた。

「歓喜」の外見が事細かに描写される一方で、メイの容姿はほとんど描写されず、その姿は妖精のようであり、五月の輝く朝のように美と喜びに満ち溢れていた、と述べられるのみである。

Mayus, that sit with so benyngne a chiere,  
Hire to biholde it semed fayerye.

...

I may yow nat devyse al hir beautee.  
But thus muche of hire beautee telle I may,  
That she was lyk the brighte morwe of May,  
Fulfilde of alle beautee and plesaunce.

(Mer. T. 1742-49)

メイが若く美しいことが伺えるが、ジャンヌアリが妻探しをしているとき、ある女性は美しく、あるものはしっかりしていて性格も良くて評判が良い、あるものは金持ちだが評判が悪い、と様々な女性を心に描いていたジャンヌアリであったが、ついにメイに到達して他の女性のことなどすっかり心から消えてしまったとある。そして、次のように書かれている。

And chees hire of his owene auctoritee;  
For love is blynd alday, and may nat see.

(Mer. T. 1597-98)

1597行目で使われている“auctoritee”という言葉は、authority という意味で、「彼自身の根拠、確信に従い」ということになる。つまり、『薔薇物語』に描かれた「歓喜」に代表されるイギリスの美の authority に従うのではなく、自分自身の authority に従ったというのである。さらに、「恋は盲目で、何も見えないのだ」という一文は、メイの美しさに疑問を投げかけるのに十分といえよう。

次に、メイの形容語 (epithet) として使われている fresshe という言葉から、メイに焦点を当てる。『貿易商人の話』では、fresshe は、May という言葉に26回使われているうちの16回が、メイの形容語として用いられている。『カンタベリー物語』全体では fressh は24回、fresshe は30回、fressher は2回、とすべての形を含めて56回用いられる。つまり、『カンタベリー物語』で使われるうちの約半数は『貿易商人の話』で用いられており、その半数以上がメイを表すために使われていることが分かる。

『カンタベリー物語』全体における *fressh* の意味を考察すると、*lusty* や *gay* という言葉と一緒に使われていることがある。この *lusty* も *gay* も元気で快活、という意味で使われたり、若さあふれる滲刺とした様子を表すのに使われている例などが見られる<sup>8</sup>。庭に女性が登場するという点で共通点を持つ『騎士の話』(*The Knight's Tale*) に焦点を当ててみると、*fressh* が 4 回、*fresshe* が 4 回、*fressher* が 1 回使われている。“Whan Ector was ybrought, al *fressh* yslayn, / To Troye...” (Kn. T. 2832-33) では、まだ殺されて間もないという意味で *fressh* が使われている。他には、花の新鮮さとかぐわしさを表した表現がいくつか見られる。“A rose gerland, *fressh* and wel smellynge;” (Kn. T. 1961) は、セーセウス (Theseus) の建設した競技場の門に彫られた愛の神ヴィーナスの像に掲げられたバラの冠の新鮮さとかぐわしさを表し、“Upon his heed he wered of laurer grene / A gerland, *fressh* and *lusty* for to sene.” (Kn. T. 2175-76) は、競技場に入ってきたアルシータ (Arcita) のそばについていたとされる、インド王エメトレウスが頭にかぶっていた月桂樹の冠のみずみずしさを表している。残りの *fressh* はエミリー (Emely) と結び付けられている。“Yclothed was she *fressh*, for to devyse.” (Kn. T. 1048) はエミリーの目にも鮮やかに映る服装を表し、続く“Hir yelow heer was broyded in a tresse / Bihynde hir bak, a yerde long, I gesse.” (Kn. T. 1049-50) は、エミリーの長く背中に垂れた金色の髪とともに、エミリーが輝いていることを示している。『騎士の話』の1068行目と1118行目に登場する *fresshe* はエミリー自身の若さと美しさを表わしているが、それだけではなく、冒頭で百合の花とも結びつけられ、また処女の女神であるディアナのもとで祈ることからも分かるように、*fressh* という言葉によりエミリーの処女性強調されている。

エミリーの *fressh* は穢れのない初々しさ、五月の朝日に輝く新緑や咲き始めた花々のような内面からの輝きを表わしていると思われる。エミリーは、語り手が騎士であることから、メイとは対照的に、『薔薇物語』の *authority* に合った外面的な美しさと、内面的な美しさを持っている女性といえる。ジャンヌアリが老騎士であることから、メイはエミリーと比較され、真の意味で「五月のように美しい」エミリーに対し、メイの美しさが疑問視される。エミリーに *fresshe* が使われている回数が少なく、『騎士の物語』と『貿易商人の話』とが離れていることから、エミリーに使った *fresshe* も意識しているかはともかくとして、エミリーの美しさが、外見のみならず、内面からあふれる気品とやさしさをも表しているのに対し、メイが文字通りに美しいかどうかは疑わしい。「恋は盲目なのだから」という言葉からも、実際に盲目になってしまうジャンヌアリからも、盲目さが強調されており、美しいかどうか、ジャンヌアリには見えていないとしか思えないのである。

メイを表す形容語として *fresshe* が使われている理由として、老人であるジャンヌアリとの対比を強調するためということも考えられる。<sup>9</sup>『貿易商人の話』では、*January* という言葉は39回使われているが、そのうちジャンヌアリに形容語が使われている例を見ると、*noble Januarie* が 1 回、*olde Januarie* が 1 回、*this noble Januarie* が 1 回、*This noble knyght, this Januarie the olde* が各々 1 回となっている。最後の表現が使われたのは、メイ

がダミアン (Damian) に手紙を書き、ダミアンの想いに応えることが明らかになった直後に使われる。貿易商人は、ダミアンにはうまくやらせておいて、話を進めましょう、(“Thus lete I Damyant aboute his nede, / And in my tale forth I wol procede.”) (Mer. T. 2019-20) と一旦ダミアンとメイとの話に区切りをつけ、ジャニュアリに再び焦点を当てる。そこで、次のような表現が使われる。

This noble knyght, this Januarie the olde,  
Swich deyntee hath in it to walke and pleye, (Mer. T. 2042-43)

上記の箇所の noble knyght も olde もジャニュアリの現実を表しているが、olde が強調され、noble knyght としての地位は、自分よりも身分の低い二人によって貶められる。更にもともとジャニュアリ (一月) という名前が、メイ (五月) という名前と対照的であるのに加え、若さゆえの fresshe と olde とが二人の年齢差を強調し、ジャニュアリとメイとが全く相容れない、両極端にいることを表しているのである。

また、チョーサーは、『貿易商人の話』を書くにあたり、デシャン (Dechanmps) のバラッドである “Contre les mariages disproportionnes” の夫婦の名前を下敷きとしたと言われている。<sup>10</sup> デシャンの詩には、“Janvier”と“Avril”という老人と若い女性の夫婦が登場するが、チョーサーは花嫁の名前を四月から五月 (May) に変えていることになる。これについて、De Weever は、May という月と lechery との関係性を指摘し、*The Belles Heures of Jean, Duke of Berry: the Cloisters, the Metropolitan Museum of Art* の calender の五月の項目に書かれた裸のカップルが、五月という月がまとうエロティックなイメージを表わしている<sup>11</sup>と述べている。つまり、“May”というエロティックなイメージに、あえて fressh という快活でさわやかな意味を持つ言葉を重ね合わせることで、皮肉的な意味合いが生じているのである。

### 3. 結論

Suzanne C. Hagedorn (2004) は、*Abandoned Women: rewriting the classics in Dante, Boccaccio, & Chaucer* の中で、『学僧の話』のグリゼルダは “power” のある女性だと論じている。黙することで男性を支配し、男性に対する力を持つというのである。しかし、グリゼルダは本当に支配力を持っていたのであろうか。グリゼルダの夫ワルテルは、女性不信を拭えず、次々とグリゼルダを試練にさらさなければ彼女を信じるができなかった。そこにはグリゼルダの意思も力も、私には感じられないように思われる。一方で、『貿易商人の話』に登場するメイこそ、黙することで男性を支配していたと考えられる。メイは、『貿易商人の話』の中で、ほとんど口を利かない。ジャニュアリの目を盗んで通じ合うダミアンとも手紙のやりとりで話をし、ジャニュアリに対しては一方的に従っているのみで、

本当に口を開くのは、物語も終盤に入ってからである。盲目のジャンヌアリと庭に入ったメイは、ジャンヌアリのために梨を取るふりをして木に登り、その木の上でダミアンと不義密通を行う。突如目が見えるようになり、その光景に大声を上げたジャンヌアリに対し、「あたしのおかげであなたの両目があくようになったのですよ」とダミアンとの逢引を、ジャンヌアリのためだったと言い逃れて見せる。ここで突如メイは雄弁になり、その言葉がジャンヌアリを説得するのである。

『貿易商人の話』によれば、男性にとって理想の女性とは、つつましく、黙って夫の言うことに従い、決して逆らわない女性だと述べられているが、逆に言えば浮気する女性は男性にとって脅威であり、苦しみでしかない。ジャンヌアリにとってすべてが思惑とは逆の方向へと進んでしまったことになる。理想の女性のはずであったメイは、実は雄弁であり、夫の言うことに従うどころか、夫の目を盗んで若い男性と通じていた。その自慢の庭も、ジャンヌアリにとってメイとの理想の結婚生活をかなえる夢の庭であったはずが、浮気の現場を目の当たりにすることで、悪夢を見させる庭となってしまった。そして、ジャンヌアリとメイとの立場が逆転して、二人は、少なくとも外見上は、仲睦まじく家へと戻っていくのである。このように、『貿易商人の話』は、『薔薇物語』とのずれ、『騎士の話』からのずれ、『学僧の話』からのずれの上に、メイという女性とそのずれの中心に置かれ、最後の最後にジャンヌアリに支配されるという立場をもひっくり返してずれの物語を終幕へと導いている。中世は男性支配の世界、キリスト教支配の時代と言われるが、そのような時代背景の中で、このような笑いの物語は、人々の心を癒す、最高のエンターテインメントであったといえよう。

注:

- 1 *Le Roman de la Rose* (134-474) には、庭を囲う壁に刻まれた、「憎悪」「背信」「卑劣」「貪婪」「強欲」「羨望」「悲嘆」「老年」「偽善」「貧困」の肖像の詳細が述べられる。
- 2 本論文では、『薔薇物語』の翻訳の引用は、篠田勝英訳 (1996) 東京、平凡社を使用した。Old French では、Sutherland, R. (1967). Oxford: Basil Blackwell. から引用すると、“Li tenz qui ne puer seiornier, / Ainz uet toz iorz sanz retornier, / Con L’eue qui s’auale toute, / N’il n’en retorne ariere goute;” である。
- 3 『カンタベリー物語』の翻訳の引用は、西脇順三郎訳『カンタベリー物語 上・下』1987年、東京：ちくま文庫を使用した。
- 4 “And if thou take a wyf unto thyn hold / Ful lightly maystow been a cokewold.”
- 5 “But take no kep of al swich vanytee; / Deffie Theofraste, an herke me.”
- 6 “I me rejoysed of my liberte, / That seelde tyme is founde in marriage; / Ther I was free, I moot been in servage.”
- 7 Sutherland, R. “El resembloit rose nouele / Da la color sus la char tender, / Que l’en li peüst tote fender / A une petite ronce. / Le front ot bel e plein sanz fronce, / Les sorciz bruns e enarchiez, / Les ieuz (vers) e si enuoisiez / Qu’il rioient toz iors auant / Que la bouche par (couenant). / Ie ne uos sai dou nés que dire; / L’en nou feïst pas mieuz de cire... / S’ot le chief blond e reluisant. / (Ie



ne soi dame si pleisent)... / D'orfrois ot .i. chapel tot neuf; / Le, qu'en ai ueü n'auoie / Chaspel si bien ouré de soie. / D'un samit qui toz ert dorez / Fu ses cors uestuz e parez, / De quoi ses amis auoit robe, / Si en estoit assez plous gobe.”

- 8 たとえば、『学僧の話』の最後に、後から付け加えられたと考えられているチャーサーの結びの部分では、lusty, grene と一緒に使われ、女性たちに対して、男性を支配するのだ、というチャーサーの結びの歌の前置きに使われ、その歌がグリゼルダの物語の暗さや神妙さを打ち払うかのように、バースの女房のように陽気で澁刺とした歌であることが fresssh, grene, lusty という言葉で表されている (“For which heere, for the Wyves love of Bathe- / Whos lyf and al hire secte God mayntene / In heigh maistrie, and elles were it scathe- / I wol with lusty herte, fresssh and grene, / Seyn yow a song to glade yow, I wene;” (Cl. T. 1170-74))。この箇所が登場するバースの女房の語る物語 fresssh は、元気がある、という意味で使われている。下記は夫が自分に向けた文句を批判する部分で出てくる一節で fresssh が gay とともに使われている (“And but thou make a feeste on thilke day / That I was born, and make me fresssh and gay;” (WBT 297-98))。また、薔薇のように美しく、という意味だが、女の色気たっぷりに歩いて見せましょう、という意味で使われている例も『バースの女房の話』に見られた (“For if I wolde selle my *bele chose*, / I koude walke as fresssh as is a rose;” (WBT 447-8))。また、バースの女房の夫の若さと力を表わしている箇所もある (“And thus they lyve unto hir lyves ende / In parfit joye; and Jhesu Crist us sende / Housbondes meeke, yonge, and fresssh abedde, / And grace t’ overbyde hem that we wedde;” (WBT 1257-60))。そのほか、fresh が活発さを表す例には、『騎士の従者の話』(*The Square’s Tale*)の、タタール国サレイの、若く勇敢で強く、家のだれよりも武芸に熱心な王カンビスカンを表すもの (“Yong, fresh, and strong, in armes desirous / As any bachelor of al his hous.”) (Sq.T. 23-24) や、オスの隼 (はやぶさ) の若さと快活さを表したもの (“Tough he were gentil born, and fresh and gay”) (Sq. T. 622) がある。また、『僧の従者の話』(*The Canon’s Yeoman’s Tale*) では、僧に仕え始めた頃の、かつての希望にあふれていた自分と、七年後の今、すっかりくたびれてしまった自分とを比較し、当時の自分の服と顔色を fresssh で表している (“Ther I was wont to be right fresssh and gay / Of clothyng and of oother good array, / Now may I were an hose upon myn heed; / And wher my colour was bothe fresssh and reed, / Now is it wan and of a leden hewe --”) (Cy. T. 724-28)。同じように真新しいという意味では、『修道院僧の話』(*The Monk’s Tale*) の “And as thise clerkes maken mencion, (Mk. T. 2121) と “She hath hym sent a sherte, fresssh and gay.” (Mk. T. 2122) との二つの例が見られる。『総序』(*General Prologue*) では fresssh が 2 回、fresshe が 1 回使われているが、そのうちの一つ “Ful fresssh and newe hir geere apiked was;” (GP 365) では、fresssh は人々の服装が新調されたものだという意味を表している。あとの二つは騎士の御曹司であり、見習いとして騎士のお供をしている若者に対して使われ、一つは若者自身を表す言葉として、もう一つは若者の服に縫いこまれた刺繍を表わす言葉として用いられている。 “He was as fresssh as is the month of May.” (GP 92) は、この騎士見習いが若く澁刺としている様子を表わしているが、その後の説明にあるように、この青年は熱烈な恋をしており、夜も眠らず、ナイチンゲールのように啼いていた、と書かれていることから、恋愛とも結び付けられていることが分かる。つまり、 “... as fresssh as is the month of May” という表現は、赤や白い花、ナイチンゲールのさえずりのような歌声とも結びつくことによって、恋の季節の五月の庭のイメージを喚起させて、恋に浮かされた様子を表しているのである。このように個々での fresssh は単に青年の若さだけを表しているのではなく、若さゆえの情熱が発散されている様子も意味すると考えられる。

- 9 De Weever, Jacqueline., *Chaucer Name Dictionary*, 1987. p. 240. に、“The epithet “fresshe” occurs..., emphasizing the incongruity between May and Januarie.” とある。
- 10 Matthewes, William., “Eustache Deschamps and Chaucer’s ‘Merchant’s Tale’,” *MLR*, LI (1951), 217-20.
- 11 De Weever, Jacqueline., *Chaucer Name Dictionary*. 1987. pp.239-40.

(あかほり なおこ 英語コミュニケーション学科研究助手)